

# 東京音楽大学リポジトリ

## Tokyo College of Music Repository

《アルプス一万尺》の原点とその変容：  
ーアメリカの象徴から子どもの歌へー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-06-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金田, 紗綾, Kaneda, Saaya メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1291">https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1291</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 《アルプス一万尺》の原点とその変容

ーアメリカの象徴から子どもの歌へー

金田 紗綾

### Origin and Transformation of "Alps ichimanjaku": From American Symbols to Children's Songs

Saaya KANEDA

#### はじめに

《アルプス一万尺》は我が国において、誰もが知っている愛唱歌の一つと言えるであろう。もともとキャンプソングとして親しまれたこの歌は、現在子どもたちを中心に主に手遊び歌として歌われており、本研究自身も幼少期に友人とこの歌で遊んでいたことを記憶している。また、《アルプス一万尺》は、替え歌として親しまれているという側面もある。

我が国で出版された《アルプス一万尺》の楽譜には、主に作詞者は不明、旋律は「アメリカ民謡」と記述されている。ここで言う「アメリカ民謡」とは、アメリカの愛唱歌の一つである《Yankee Doodle<sup>1</sup>》を指していると言えよう。この旋律は、西洋において様々な目的で使用され、変容を繰り返してアメリカの愛唱歌《Yankee Doodle》となった。また、《Yankee Doodle》としてアメリカで定着した後についても、様々な変容を遂げているのである。同じ替え歌として誕生した二つの歌であるが、その使われ方は全く異なるものである。《Yankee Doodle》はアメリカの「誇り」の象徴として親しまれたのに対し、《アルプス一万尺》はキャンプソングや子どもの手遊び歌として親しまれてきた。

本研究では、この旋律の起源から、《Yankee Doodle》としてアメリカにて定着するまでの変容、そして来日後の変容を旋律と歌詞から探り、この旋律がどのようにして《Yankee Doodle》ではなく《アルプス一万尺》として我が国において定着したのかを考察する。また、この旋律が引用された歌の内容を調査することにより、音楽的な変容とともに、当時の人々の流行や意識の変容についても知ることができると考えている。

## 1 誇りの象徴の誕生

### 1-1 現在歌われている《Yankee Doodle》について

我が国において《アルプス一万尺》として親しまれている旋律は、アメリカの愛唱歌の一つである《Yankee Doodle》のものとして知られている。《Yankee Doodle》は長期にわたってアメリカの人々によって親しまれ、コネチカット州<sup>2</sup>の州歌にも採用されたが、この歌自体、歌詞や旋律、演奏形態についても様々な変容を遂げている。

---

<sup>1</sup> “Yankee”は現在ではアメリカ人、特にアメリカ合衆国北東部に住む白人に対する俗称として使われる。“Doodle”は「間抜けな」など他者を嘲る際に使用する語と言える。

<sup>2</sup> State of Connecticut

まず、現在主に歌われている歌詞は二種類存在する。一つ目は”Yankee Doodle～”から始まる歌詞である(譜例 1)。もう一つは”Fath’r～”から始まる歌詞(譜例 2)であり、こちらは 2 番以降の歌詞が続けて記載されていることが多いが、内容や順番は文献により様々であった。この二種類の歌詞は、続けて歌われる場合”Yankee Doodle ～”の後に”Fath’r～”と続くのが一般的であるが、”Yankee Doodle～”の歌詞のみ独立して歌われることもある。

また、旋律についても楽譜によって異なる部分がある。例えばどちらもアウフタクトが使用されている歌であるが、一つ目の楽譜は歌い出しのアウフタクトは存在しないが、二つ目の楽譜の場合、歌い出しの部分にアウフタクトが存在していることがわかる。

譜例 1 《Yankee Doodle》(Steven Kellogg 1996: 1)

譜例 2 《Yankee Doodle》(高山 1976: 155)

## 1-2 《Yankee Doodle》の原点

「《Yankee Doodle》がアメリカの名物となったのは 1755 年のことである。」(Banks 1898: 47)。しかし《Yankee Doodle》の旋律は、アメリカで定着する以前に様々な国で使用されていたことがわかった。その原点はおそらく 1500 年代まで遡る。収穫の歌としてオランダで歌われていたのだ。それは、労働者が「彼らが飲むことができるバターミルクと同じくらいと、穀物の 10 分の 1」<sup>3</sup>の報酬を受け取る際に、この旋律で繰り返し歌っていたものである。歌詞は、以下の通りであり、言葉遊びのようなものとなっていることがわかる。

<sup>3</sup> 複数の文献に“as much buttermilk as they could drink、 and a tenth of grain”と記述されている。

“Yanker, didel, doodle down,  
Diddle, dudel, lanther,  
Yanke viver, viver vown,  
Botermilk und tanther.”

1500 年代当時に採譜された楽譜は見られなかったが、おそらくアウフタクトのない形で歌われていたのであろう。Banks(1898)はこの旋律について、「これはオランダからイングランドに持ち込まれた可能性がある。」と述べた (Banks 1898: 47)。他にも、フランスのブドウ園で収穫の歌や、スペインではビスケー(Biscay)の古い歌など正確な時代や音楽的な情報は定かではないものの、実に様々な国で知られている旋律であると推測する。

一方、オランダから持ち込まれたとされるこの旋律は、イングランドにてさらに現在の《Yankee Doodle》に近い形へと変容する。《Yankee Doodle》の基礎となる旋律(譜例 3)はチャールズ 1 世より前の時代にイングランドの農民によって歌われていたと考えられる。



譜例 3 《Yankee Doodle》の基礎とみられる旋律 (Sonneck 1909: 97)

付点の無い非常にシンプルなリズムであり、旋律も現在のものとは異なる部分が多く見られるため類似しているとは言えないが、《Yankee Doodle》と小節数は一致しており、コーラス部分に入る小節も 9 小節目と一致している。また、8 小節目と 16 小節目は音高、リズムともに一致している。この時点で歌い出しのアウフタクトは存在していない。

また、この旋律は、ナーサリーライム<sup>4</sup>の一つである《Lucy Locket》の旋律としてもイングランドにおいて広く親しまれていたとされているが、Cromwell<sup>5</sup>がオックスフォードに乗り込む際、小さな馬に乗った彼の様子を嘲るためにイングランドの王党員によってこの旋律は次のような歌詞が付け加えられた。

“Nankee Doodle came to town,  
Upon a Kentish pony,  
He stuck a feather in his cap,  
Upon a macaroni”

<sup>4</sup> Nursery Rhymes、イギリスの伝承童謡

<sup>5</sup> Oliver Cromwell、1599-1658

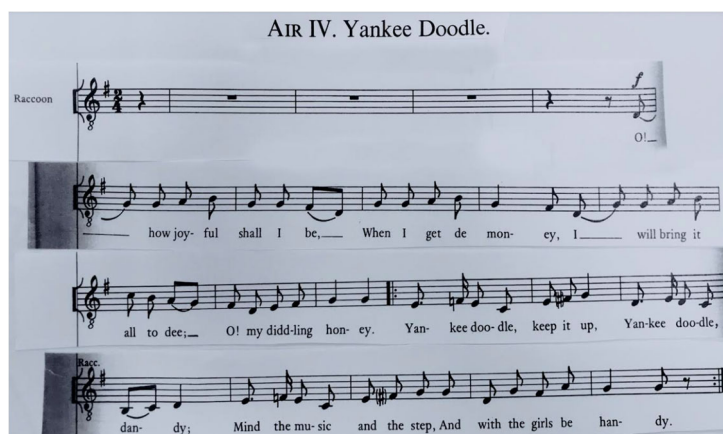
現在広く歌われている歌詞の一つとして挙げたものと非常に近い形になっていることがわかる。歌詞中の”Nankee”については、Christopher ら(2016)は、「ある理論によると”Yankee”(または”Yankey”)は”Nankey”から派生したもの」(Christopher、 Jeffrey 2016: 1079)であり、”Nankey”は Cromwell を指す語とされている。“macaroni”について Helen(1884)は、「イタリアのマカロンのような形と大きさの小さなロゼットで、発音と綴りが似ている2つのイタリア料理の名前を混同した英語の誤りからそう呼ばれた。」(Helen 1884: 492)と述べている。なお、現在の楽譜には見られる後半のコーラス部分の歌詞は、この当時に関する文献では見当たらなかった。

その後、フレンチ・インディアン戦争<sup>6</sup>の際にイギリスの常備兵の一人であった軍医 Richard Shuckburg によって歌詞が付けられ《Yankee Doodle》は誕生したとされている。植民地軍の人々が不揃いの服を身に纏っている様子を見た彼は、すぐにクロムウェルを嘲るために王党員によって作られた歌を思い出し、これと共に彼の作った新しい詩と楽譜を書き留め、大陸バンド<sup>7</sup>のリーダーに与えた。すると間もなく、この歌はイギリス兵たちに受け入れられた。Richard Shuckburh によって書かれた楽譜は本研究では見ることはできず正確な旋律や歌詞は定かではないが、文献調査の結果、付けられた歌詞は譜例 1 の”Yankee Doodle~”の歌い出しのものと考えられる。イギリスの Hugh Percy 大佐がボストンからレキシントン、コンコードへと隊列を導いた際に、彼の部下たちは《Yankee Doodle》で行進したと言われている。こうしてこの歌は植民地軍を嘲るためのツールの一つとなったのである。

### 1-3 誇りの象徴へ

しかし、アメリカの人々は反抗心を鼓舞するものとしてこの歌を歌い始めた。旋律に新たな歌詞を加え、イギリス人による侮辱の歌ではなくアメリカ人の誇りの歌として。その新しい歌詞の中には、アメリカ独立戦争<sup>8</sup>の指導者であり、その後アメリカ初代大統領に就任するジョージ・ワシントン<sup>9</sup>も登場する。

独立戦争以前の 1767 年には Andrew Barton<sup>10</sup>によるバラードオペラ ”The Disappointment or



譜例 4 “The Disappointment or the Force of Credulity”中の歌曲  
《Yankee Doodle》の主旋律 (Barton 1976: 52-55 より作成)

<sup>6</sup> French and Indian War、 1755-1763

<sup>7</sup> Continental band

<sup>8</sup> American War of Independence、 1775-1783

<sup>9</sup> George Washington、 1732-1799

<sup>10</sup> Andrew Barton、 生没年不詳、この名はコードネームとされている。

the Force of Credulity”の中の歌曲の一つとして、《Yankee Doodle》というタイトルはそのまま、この旋律が引用されている(譜例 4)。

楽譜を見てみると、前半の歌詞は全く異なるものであるが、現在の《Yankee Doodle》の後半であるコーラス部分と類似した旋律が存在することから、この当時はコーラス部分も歌詞を付けて歌われていた可能性が考えられる。また、現在一般的に歌われているものと全て同一の箇所という訳では無いが、アウフタクトも存在する。したがって、この時にはすでに現在の《Yankee Doodle》の旋律に近い形で歌われてたことが考えられる。

1777 年にはハーバード大学の学生でレキシントンの戦い<sup>11</sup>でミニットマン<sup>12</sup>を務めていた Edward Bangs によって改めて歌詞が書き直された。この歌詞は”The Yankey’s return from Camp”と名付けられ、アメリカにおいて一般的な歌詞として親しまれるようになる(図 1)。

<p><i>The Yankey's return from Camp</i> Father and I went down to camp, Along with Captain Gooding, There we see the men and boys. As thick as hasty pudding.</p> <p><i>Chorus.</i> Yankey doodle keep it up, Yankey doodle, dandy, Mind the music and the step, And with the girls be handy.</p> <p>And there we see a thousand men, As rich as 'Squire David; And what they wasted every day, I wish it could be saved.</p> <p>Yankey doodle, &amp;c.</p> <p>The 'lasses they eat every day, Would keep a house a winter: They have as much that I'll be bound They eat it when they're a mind to.</p> <p>Yankey doodle, &amp;c.</p> <p>And there we see a swamping gun, Large as a log of maple, Upon a ducid little cart, A load for father's cattle.</p> <p>Yankey doodle, &amp;c.</p> <p>And every time they shoot it off, It takes a horn of powder— It makes a noise like father's gun, Only a nation louder.</p> <p>Yankey doodle, &amp;c.</p>	<p>I went as nigh to one myself, As 'Siah's underpinning; And father went as nigh again, I tho't the deuce was in him.</p> <p>Yankey doodle, &amp;c.</p> <p>Cousin Simon grew so bold, I tho't he would have cock'd it: It scar'd me so, I shrink'd it off, And hung by father's pocket.</p> <p>Yankey doodle, &amp;c.</p> <p>And captain Davis had a gun, He kind of clapt his hand on't, And stuck a crooked stabbing iron Upon the little end on't.</p> <p>Yankey doodle, &amp;c.</p> <p>And there I see a pumpkin shell As big as mother's bason, And ev'ry time they touch'd it off, They scamper'd like the nation.</p> <p>Yankey doodle, &amp;c.</p> <p>I see a little barrel too, The heads were made of leather, They knock'd upon't with little clubs, And call'd the folks together.</p> <p>Yankey doodle, &amp;c.</p> <p>And there was captain Washington, And gentlefolks about him, They say he's grown so tarnal proud, He will not ride without 'em.</p>	<p>Yankey doodle, &amp;c. He got him on his meeting clothes, Upon a slapping stallion, He set the world along in rows, In hundreds and in millions.</p> <p>Yankey doodle, &amp;c. The flaming ribbons in their hats, They look'd so taring fine, ah, I wanted pockily to get To give to my Jemimah.</p> <p>Yankey doodle, &amp;c. I see another snarl of men A digging graves, they told me, So tarnal long, so tarnal deep, They tended they should hold me.</p> <p>Yankey doodle, &amp;c. It scar'd me so, I hook'd it off, Nor stop'd, as I remember, Nor turn'd about 'till I got home, Lock'd up in mother's chamber.</p> <p>Yankey doodle, &amp;c.</p>
---	--	--

図 1 “The Yankey’s return from Camp” (Shields, David S 2007: 618-620)

そして Richard Shuckburg による《Yankee Doodle》の誕生から約 25 年後の 1781 年、Cornwallis 卿<sup>13</sup>率いるイギリス(British)軍が撤退する際、《Yankee Doodle》を演奏していたのは、かつてイギリス軍に嘲られていた大陸軍つまり、アメリカの人々であった。このように《Yankee Doodle》の旋律はアメリカの誇りの象徴としての地位を手に入れたのである。

その後も、《Yankee Doodle》は様々な変容を遂げる。替え歌として誕生したこの歌は、さらに新たな歌詞を与えられた。その数は定かではないものの、奥田によると「実に合計一九〇を超すといわれている」(奥田 2005: 55)。現在広く歌われている歌詞の一つであ

<sup>11</sup> Battle of Lexington and Concord, 1775

<sup>12</sup> minuteman: アメリカの独立戦争時の民兵。

<sup>13</sup> Charles Cornwallis, 1738-1805

る”Fath’r”の歌い出しの歌詞は、この当時にはすでに多くの人々に歌われていたと考えられる。さらに、William(2008)の研究によって 1794 年から 1904 年の間に《Yankee Doodle》を引用した器楽曲は、60 曲存在することが明らかにされた。《Yankee Doodle》はアメリカの出身かどうかを問わず様々な作曲家によって、「アメリカ」を表現する際に新たな音楽作品として旋律を引用されたりしながら、より一層多くのアメリカ国民に親しまれる歌となった。

## 2 《Yankee Doodle》から《アルプス一万尺》へ

### 2-1 《アルプス一万尺》について

次に、《Yankee Doodle》がどのような形で来日し、現在の《アルプス一万尺》に変容したのかを探る。現在、我が国の人々によって歌われている《アルプス一万尺》は次のような楽譜で表される(譜例 5)。

⑫ アルプス一万尺

アメリカ 民謡  
石丸 寛 編曲

かるくたのしく ♩=120

1. アルプス いちまんじゃく こやりの うーえで アルペン  
2. きーのう みたゆめ でっかいさい ゆめだよ のーみが  
3. いちまん じゃーくに テントを はーれば ほーしの

おどりを おどりま しょう へい }  
リュックしょつて ふじとざん へい } ラン ララ ラ ララ ララ  
ランプに てがとく へい }

ラン ララ ラ ララ ラ ラン ララ ラ ララ ララ ララ ララ ララ ララ ララ ララ ララ

譜例 5 現在一般的に歌われている《アルプス一万尺》(小林 1998: 18)

この歌の歌詞に登場する“アルプス”は日本アルプス山脈を指しており、“一万尺”つまり標高およそ 3030 メートルの槍ヶ岳山頂付近に存在する岩が“小槍”と呼ばれている。したがってこの歌は、我が国の山が題材とされており、アメリカの「誇り」の象徴とはかけ離れた内容となっている。

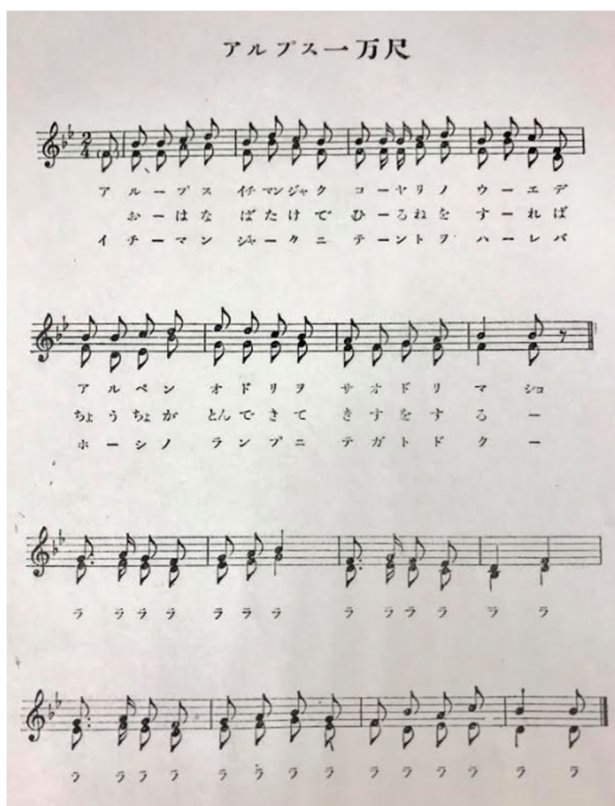
また、《アルプス一万尺》がテレビを通して我が国の人々の耳に入ったのは、1962 年 8 月のことである。NHK『みんなのうた』で編曲は石丸寛<sup>14</sup>が手がけ、東京少年少女合唱団の歌声で放送されたが、『みんなのうた』公式ホームページによると当時の映像は残っておらず、実際に観ることはできない。

<sup>14</sup> 石丸寛、1922-1998：日本の作曲家

## 2-2 《Yankee Doodle》との比較

《アルプス一万尺》と《Yankee Doodle》を比較<sup>15</sup>すると、先述の通り歌詞や歌の使われ方は全く異なると言って良いだろう。楽譜を見て考えられる二曲の異なる点の一つとしては、アウフタクトの有無である。歌の前半において、歌い出しのアウフタクト有無に関わらず《Yankee Doodle》は歌詞の二節目、三節目、四節目が二拍目の最後の八分音符から始まっているためアウフタクトが使われた歌と言える一方、《アルプス一万尺》は歌詞の各節が小節の一拍目の最初の八分音符から歌われていることから、《アルプス一万尺》にはアウフタクトが無いと言える。

一方、本研究で見つけることができた文献の中で、《アルプス一万尺》が楽譜として収録された最も古いものは、1956 年に出版されている(譜例 6)。先ほど挙げた譜例 5 と比較すると、歌い出しがアウフタクトで始まっていることがわかる。原曲とする《Yankee Doodle》の旋律を忠実に引用しようとしたためか、歌い出しの“アルプス”という歌詞を“アルプス”と伸ばさなくてはならない。日本語の歌詞と一致しないリズムだということは明らかであり、《Yankee Doodle》はアウフタクトから始まる形で日本に伝わったことが推測できる。他にも歌い出しの部分に歌詞のつけられていないアウフタクトの八分音符が書かれている楽譜も存在した。



譜例 6 1956 年に出版された《アルプス一万尺》の楽譜  
(松方・川崎 1956: 187)

## 2-3 《Yankee Doodle》の来日と《アルプス一万尺》の誕生

アメリカの象徴を表す音楽の一つとなった《Yankee Doodle》は、黒船とともに来日した。1853 年 7 月 14 日のことである。久里浜にて大統領親書の受け渡し式が行われ、その帰途で《Yankee Doodle》が鼓笛隊によって演奏されていたことが、ペリーに同行していた画家の Heine<sup>16</sup>によって記録されている。しかし、この時に《Yankee Doodle》が演奏されたという日本人による記録が見られないこと、黒船の来航と近い時期に《Yankee Doodle》が採譜されたり、歌われていた形跡が見当たらないことから、このことが《アルプス一万尺》誕生の原点とするのは無理があると考えられる。

<sup>15</sup> 譜例 1、2 を参照

<sup>16</sup> Peter Bernhard Wilhelm Heine、1827~1885



## ちやわんむしのうた



譜例 8 《ちやわんむしのうた》(本研究により採譜)

この歌を本研究において考察するに至った経緯として、2018 年に本研究者が所属する大学の授業内で原田敬子准教授<sup>18</sup>により《Yankee Doodle》の旋律と類似した歌として紹介されたことが挙げられる。旋律の特徴としては、4 度と 7 度の音を避けたいわゆるヨナ抜き音階にされており、日本の歌らしいとさえ感じさせるような旋律となっていることがわかる。また、5 度の跳躍は避けていることが 2 小節目から伺える。後半のコーラス部分は冒頭の 2 小節は《Yankee Doodle》の面影を感じるものの、それ以降は類似した旋律とは言えないだろう。鹿児島の人々によって歌い継がれていく中で変容を遂げたことが推測される。

### 2-6 替え歌として親しまれた《アルプス一万尺》

《アルプス一万尺》歌詞は登山をテーマにした内容であり、アメリカの誇りの象徴である《Yankee Doodle》のそれとは全く異なる内容である。しかし、《アルプス一万尺》についても一番の歌詞に続くいわゆる 2 番、3 番などの歌詞を掲載する楽譜も存在する。その内容はタイトルである《アルプス一万尺》や登山に関するものから、無関係とみられるものまで様々であるが、このタイトルを変更することもなく《アルプス一万尺》の歌詞とされている。また横山は、「この曲の面白さは、即興の歌詞をつけて歌うところにあります。」(横山 1967: 172)と述べており、替え歌も盛んにされていることがうかがえる。これらのことから、特定の個人

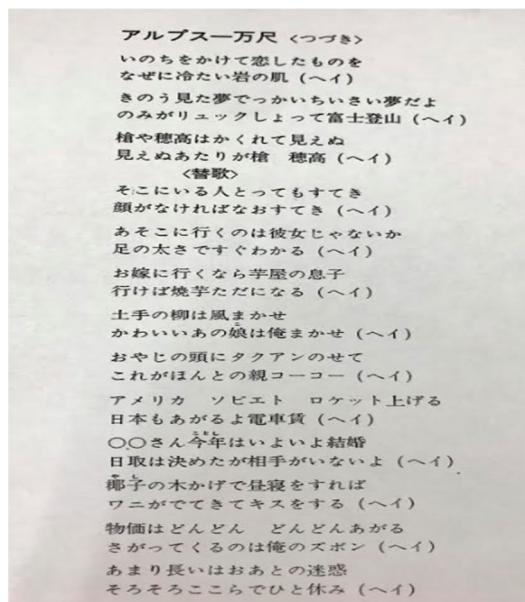


図 2 《アルプス一万尺》歌詞の続きと替え歌の例  
(横山 1967: 173)

<sup>18</sup> 原田は 2016 年に個人研究に係る調査時に、「鹿児島弁で親しみのある曲を歌う」イベントにおいて、鹿児島在住のユニット おごじょーず のメンバーの Emily 氏の所有する非公開録画を視聴した際に、同ユニットによって歌われた「ちやわんむしのうた」(鹿児島弁)の類似性に気づき、Emily 氏、観光局の県庁職員と鹿児島県歴史資料センター黎明館館長、鹿児島純心女子短期大学 小川学夫 名誉教授へ報告した。

がすべて作詞したのではなく、複数の人々によって多様な歌詞がつけられ、歌い継がれていることが推測できる。したがって、この旋律は《Yankee Doodle》と同様に我が国においても替え歌として親しまれていたと考えられる。『登山全書 第2巻 岩登り篇』では、《アルプス一万尺》の解説として「かえ唄だから、いろいろな作詞で自由に歌ったら面白いと思う。」(松方、川崎 1956: 187)と記述されている。歌集に記載された歌詞の内容や数は歌集によって様々であった。最も多くの文献で使われていた歌詞は『登山全書 第2巻 岩登り篇』(松方、川崎 1956)の楽譜に記載されたもの(譜例 6)であるが、中には《アルプス一万尺》とは全く関係のない内容の歌詞が掲載されているものも存在したものの、さらに、替え歌として作られた歌詞についても紹介しているものも見られた(図 2)。これらの歌詞を見てみても、同様に《Yankee Doodle》との関連性は見られない。やはり、《Yankee Doodle》の歌詞や、旋律を使用する目的などは我が国においては受け継がれなかったことが推測される。

### 3 まとめと考察

#### 3-1 《アルプス一万尺》の誕生と普及に関する考察

ここまで、《Yankee Doodle》の誕生と変容、そしてこの旋律が来日してからの変容について論じてきた。本研究では、日本語の歌となったこの旋律の楽譜から、旋律の変容に関して次のように考える。まず、1950~60 年代の比較的初期の楽譜では、歌詞のリズムと合っていないにもかかわらずアウフタクトが存在していた。これは、アメリカでつけられたとされる”Fath’r~”の歌詞の《Yankee Doodle》の旋律を忠実に引用しようとした意図が伺える。また、当時の楽譜を見ると、旋律の輪郭は一致しているものの、楽譜によって複数の箇所の違いが見られる。

しかしこの旋律は、その後、原曲とする《Yankee Doodle》により近いものとなると同時に、歌詞と旋律ともに楽譜による差異はほとんど見られなくなった。これは西洋の音楽に慣れ親しんだ作曲家、主に石丸寛による編曲が要因であると考えられる。彼によって、”Yankee Doodle~”の歌い出しである原曲の旋律により近い形で編曲された楽譜の出版や、NHK のテレビ番組『みんなのうた』の放送などによって、人々に歌われる《アルプス一万尺》の旋律が統一されていったのである。

また、《むこうのお山に》は《アルプス一万尺》以前に作られたものだと本研究では考えている。《むこうのお山に》はボーイスカウトの先駆者である中野忠八によって歌詞がつけられた。この歌はボーイスカウトの関係者や、アウトドアを楽しむ人たちによって親しまれ、やがて替え歌として誕生したのが《アルプス一万尺》ではないかと考察する。1950~1960 年代当時は登山が若者の間で流行していたこともあり、《アルプス一万尺》は誕生後、引き続きアウトドアを楽しむ人々によって歌い継がれ、様々な替え歌も付け加えられながら、現在のような子どもの歌へと変容していったのだ。一方、この旋律を使用した歌として《アルプス一万尺》が我が国に浸透してからは《むこうのお山に》が歌われる機会は極端に少なくなったことが考えられる。

一方、《ちゃわんむしのうた》は《Yankee Doodle》の替え歌としてではなく、鹿児島民謡として人々に親しまれており、2014 年には NHK による子ども向けの番組である『にほんごであそぼ』でも紹介されるなど、現在も歌い継がれている。今回の研究では《ちゃわ

んむしのうた》の起源や詳しい情報についての文献を見ることはできなかった。おそらく西洋からの貿易船の乗組員などによって伝えられたことが始まりでは無いかと推測しているが、今後も調査する必要があると考える。

### 3-2 象徴となった《Yankee Doodle》と子どもの歌になった《アルプス一万尺》

では、なぜ我が国においてこの旋律は《Yankee Doodle》と同様に誇りを表す内容の歌詞をつけられることはなかったのか。我が国では《Yankee Doodle》の歌詞は人々に浸透しなかった可能性が挙げられる。《向こうのお山に》や《アルプス一万尺》以前に《Yankee Doodle》としてこの旋律を収録した楽譜は少ない。最も古いものとしては、1916年のハーモニカの曲集(吟風散士『ハーモニカ名曲集』: 十字屋楽器店)のに収録されているが、西洋の諸外国の名曲を寄せ集めた曲集となっており、当時の我が国の人々に親しまれている名曲とは言えないように思える。また、1936年に出版された『世界音楽全集 第92巻』(春秋社 編: 春秋社)にもカタカナ表記のタイトルで《ヤンキードドル》の楽譜が収録されている。本研究で見つけることができた音源としては1937年に慶應義塾マンドリン・クラブによって演奏されたもののみであった。おそらく当時の人々にとってこの旋律は「外国の曲」であり、日常的に広く歌われる歌ではなかったことが推測される。つまり《Yankee Doodle》は我が国では一般的になることはなく、《むこうのお山に》や《アルプス一万尺》の旋律の引用元という意識がなかったのではないだろうか。我が国の人々は《むこうのお山に》や《アルプス一万尺》として初めてこの旋律を耳にしたという可能性は十分に考えられるが、仮に《Yankee Doodle》がこれらの歌の原曲であることを知っている人がいたとしても、1950~60年代という反戦の意識が流行していた時代でもあり、原曲の歌詞のような国の誇り、いわゆるナショナリズムをテーマにした歌が広く親しまれることはなかったのだろう。

本研究では、数世紀もの長い間人々に親しまれてきた一つの旋律に注目しその変容を調査してきた。農民の収穫の歌として始まったと考えられるこの旋律は、様々な変容を遂げて人を嘲るための旋律から、独立のために戦うアメリカ人の支えとなり、ついにはアメリカの誇りの象徴となった。一方、我が国に伝わったこの旋律は、ボーイスカウトの歌、キャンプソング、そして子どもの歌として、現在もたくさんの人々によって親しまれている。

本研究で注目したこの旋律と同様に、その当時の流行や人々の意識によって様々な歌として変容を遂げながら親しまれてきた旋律は複数存在することが推測される。《アルプス一万尺》は歌の内容を見たところ、その使われ方はアメリカと我が国では全く異なるものであったが、その変容を見ることで当時の人々の意識や流行をうかがい知ることができる。歌は人々の日常に寄り添いながら変容していくのである。

## 参考文献

### 【和書】

吟風 散士

1916 『ハーモニカ名曲集』(東京: 十字屋楽器店)

春秋社 編

1936 『世界音楽全集 第 92 巻』(東京: 春秋社)

著者不明

1950 『ボーイスカウト歌集(第一集)』(東京:財団法人ボーイスカウト日本連盟)

松方 三郎・川崎 隆章 編

1956 『登山全書 第二巻 岩登り篇』(東京: 河出書房)

筒井 隆介編著

1960 『楽しいキャンプソング』(東京: 国際音楽出版社)

横山 太郎編

1967 『ゆかいな歌 ゲームソング集』(東京: 野ばら社)

平野 敬一

1972 『マザー・グースの唄』(東京:中央公論社)

平野 敬一

1973 『マザー・グース童謡集』(東京: ELEC 出版部)

高山 宏之

1976 『アメリカのうた』(東京: 研究社出版)

藤野 紀男

1996 『マザーグースの唄が聞こえる』(東京: 洋販出版株式会社)

小林 美実

1998 『こどものうた 200』(東京: チャイルド社)

笠原 潔

2001 『黒船来航と音楽』(東京: 吉川弘文館)

鷺津 名都江

2001 『マザーグースと日本人』(東京: 吉川弘文館)

西川 久子

2004 『「むすんでひらいて」とジャン・ジャック・ルソー』(京都: かもがわ出版)

奥田 恵二

2005 『「アメリカ音楽」の誕生 社会・文化の変容の中で』(東京: 河出書房新社)

辻田 真佐憲

2011 『世界軍歌全集 歌詞で読むナショナリズムとイデオロギーの時代』(東京  
社会評論社)

鈴木 紘治

2012 『マザー・グースの謎を解くー伝承童謡の詩学ー』(東京: コールサック社)

【海外文献】

Andrew Barton

1976 *The Disappointment or; The force of credulity.* (Madison: A-R Editions.)

Helen, Kendrick Johnson

1884 “The Meaning of Song” *University of Northern Iowa.* 138/330, 487-501.

Banks, Louis Albert

1898 *Immortal Songs of Camp and Field.* (Cleveland: The braes Brothers Company.)

Sonneck, Oscar George Theodore

1909 *Report on “The Star-Spangled Banner”, “Hail Columbia”, “America” and “Yankee Doodle”.* (Washington: Govt. Print. Off.)

Steven Kellogg

1996 *Yankee Doodle.* (New York: Simon & Schuster Books for Young Readers.)

Shields, David S

2007 *American poetry : the seventeenth and eighteenth centuries.* (New York: Library of America.)

William Gibbons

2008 ““Yankee Doodle” and Nationalism, 1780-1920” *American music.* 26/2, 246-274.

Christian McWhirter

2012 *BATTLE HYMNS* (USA: Tseng Information Systems, Inc.)